村上忠順翁顕彰会報

羽田八幡宮文庫址　豊橋市花田町　撮影：甲村正貴

★ 目 次 ★

■ 会長の言葉 - P.2
顕彰会設立三十五年に想いを寄せて

■ 女性部研修会感想文 - P.3
「村上忠順翁顕彰会研修会」に参加して

■ 歴史探訪感想文 - P.4
忠順ゆかりの地を訪ねて豊橋

■ 村上忠順と小澤蘆庵家集 - P.5

■ 令和５年度活動報告 -P８

■ 第１８回「忠順大賞」入賞作 - P.9

村上忠順翁顕彰会報　第 35 号
編集　村上忠順翁顕彰会事務局
発行　令和６年３月 31 日

顕彰会設立三十五年に想いを寄せて

村上忠順翁顕彰会
会長　石川　嘉仁

日頃は当顕彰会活動に対しましてご理解・ご支援をいただき、心より感謝申し上げます。

平成元年に村上忠順翁顕彰会が設立され、支えていただいた全ての皆様のおかげをもちまして、令和六年度は三十五年目を迎えることとなります。平成の時代とともに歩んできた村上忠順翁顕彰会の様々な活動が、地域の方の心に少しずつ届いていると感じております。

発足当時の趣意書を振り返りますと、昭和六十四年当時、私達の郷土豊田市は自動車のまちとして発展し、世界に大きく飛躍しようとしているそんな時代でありました。こうした都市の発展と相まって、郷土の歴史と文化は今後の都市づくりに大きな示唆を与えてくれる存在であり、都市文化の向上は故郷の歴史や文化をより深く理解することから始まると趣意書に記載があります。

村上忠順翁ゆかりの前林中学校区において「ふるさとを語る会」・「区長会」・「有識者」など多くの方々のご協力により顕彰会が結成され、忠順先生の偉業を調査、研究し理解を深め広く世間に知らせ、愛着の持てるまちづくりの輪を広げていくために、現在まで活動を継続してきました。この先も、郷土文化の先覚者のひとりである村上忠順翁を顕彰する活動を通して、ひとりでも多くの方に先人のたゆまぬ努力・考え方など歴史からしっかりと学んでいくことの大切さ、今を生きる我々に欠けているものは何なのかをしっかりと伝えていくことが必要ではないかと感じます。

顕彰会の活動も令和五年度は、日常生活に大きく影響を与えたコロナ禍前の形で諸行事を開催することができました。ありがとうの想いを込めた短歌の募集も、前林中学校、堤小学校、駒場小学校からたくさんの応募をいただき、親子・家族の絆を再実感し、大変素晴らしい輪が広まっていると感謝しております。今回も応募して頂いた沢山の作品は家族団欒の何気ない幸せな時間や、お出かけした時に子供の目線で素直に感じた想いが感じられる素晴らしい作品ばかりでした。完全ではないですが以前の日常が戻りつつあることを感じています。

令和四年度に開設したホームページでは、ひとりでも多くの方に見て、知って、学んでもらい、忠順さんの生きざまに共感していただけるようにしております。まだまだ検索数は十分ではありませんが、より多くの皆様に見ていただけるよう、これからも顕彰会活動の充実と合わせて、魅力あるホームページとなるように頑張っていきますので、是非一度検索してホームページをご覧いただきたいと思います。

これからも顕彰会設立趣意を私自身もしっかりと理解し、現代社会に蔓延している個人主義的な考えではなく、人との繋がりを大切にする村上忠順翁の生き様を、地道に伝え続ける活動のお手伝いしていければと思います。最後になりますが、縁あって前林中学校区に暮らす我々だからこそ、忠順さんの教えを学んで・知って・伝え続けていくことができ、そうしていく責任があると考え、地域ならではの様々な活動に取り組んでいきますので、本顕彰会活動に対し、今後とも一層のご支援を宜しくお願い致します。

女性部研修会感想文

「村上忠順翁顕彰会研修会」に参加して

前林町　鈴木逸代

ある六月の回覧板に「村上忠順翁顕彰会女性部研修会」を見つけ、そのスケジュールの中に「掛川城・掛川花鳥園」と記載されていたので、参加させていただきました。「村上忠順」という名前は知ってはいましたが、地元の生まれくらいで何をされていた方なのか知りませんでした。また、見学する建物が村上忠順とどのような関連があるのかという思いで当日を迎えました。

七月の暑い中、四〇名の女性会員と事務局の皆様と目的地に向かいました。最初の目的地までの車中での勉強会で、村上忠順の功績を知りました。地元にこんな素晴らしい方がいたことを知らなかったなんて、とても恥ずかしいことだと思いました。

配布された資料を読んでみますと「大日本報徳社」、「仰徳記念館」、「仰徳学寮」など村上忠順との接点が少しずつ分かってきました。そうしていろうちに、大日本報徳社大講堂に着きました。中に入り報徳社運動のことをスライド式で教えていただきました。その運動の始めは、二宮金次郎（尊徳）が、全国各地の困窮した農村の救済から、その行動と実践を体系化したものでした。尊徳の教えの四つの柱「至誠・勤労・分度・推譲」や「報徳訓」は、今、私たちが忘れかけている道徳心を思い出させるものでした。それに、何とそこに日本初の総理大臣「伊藤博文」の直筆の書があり、タイムスリップした感じでした。

それから、掛川城と掛川城御殿を見学し歴史や構造などを学びました。時間の都合で天守閣に行けなかったことが、とても残念でした。

お昼は、近くにある「こだわりっぱ」でお食事をいただきました。茶そばが美味しかったです。

そのあと、掛川花鳥園に行きました。私は今回の研修会で一番の楽しみだったのが、この花鳥園でハシビロコウを見ることでした。念願のハシビロコウを見てとても感激しました。三時からバードショーがあり、なんと私はちゃっかりショーに参加していました。楽しかったです。

今回の研修旅行は、とても有意義な一日でした。報徳社の建物から、歴史に触れることが出来て、歴史を感じる旅行もいいものだと思いました。この企画をしてくださった事務局の方々大変お疲れ様でした。ありがとうございました。最後に尊徳先生の思想の中で（しおりの中に書いてありました）気に入った言葉があったのでかいてみます。

どんなものにも　よさがある
どんなひとにも　よさがある
よさがそれぞれ　みんなちがう
よさがいっぱい　かくれている
どこかとりえが　あるものだ
もののとりえを　ひきだそう
ひとりのとりえを　そだてよう
じぶんのとりえを　ささげよう
とりえとりえが　むすばれて
このよはたのしい　ふえせかい

歴史探訪感想文

忠順翁ゆかりの地を訪ねて＝豊橋

令和五年十月十三日　高岡町　早川英明

今回の「歴史探訪」は四十名の参加を得て穂の国・豊橋を訪れた。そして、このミニ旅は、江戸幕末から明治・大正にかけて書物の収集と文庫の整備が成され、三河の三大文庫と称される「羽田八幡宮文庫（豊橋）」、「岩瀬文庫（西尾）」、「村上文庫（刈谷）」の中から、忠順翁とともに本居門下の国学者で、ともに尊皇活動に共鳴し、親交のあった羽田野敬雄を中心に設立された「羽田八幡宮文庫」を訪ねることから始まった。

最初に豊橋市花田町にある羽田八幡宮を参拝後「羽田八幡宮文庫址」を見学した。

次に文庫の蔵書が収蔵・保管されている豊橋市中央図書館を訪問し、学芸員の岡村氏より文庫の形成の特徴について講義を受けるとともに、忠順翁の著書の現物を含む資料数点について閲覧させていただいた。蔵書についてはデジタル版による閲覧が可能である。

「羽田八幡宮文庫」の特徴。

① 文庫は通常は個人又はグループが自分たちで見て、読んで楽しむコレクションとして成立することが殆ど（村上文庫も個人収集）であるが、「羽田八幡宮文庫」は蔵書一覧が整備され、蔵書の閲覧と貸し出し（知の共有化と公開）をしており今で言う図書館としてスタートし、蔵書（書庫）に陰荘（閲覧室）、講義室が併設されていた。

② 書籍の収集は、現在のクラウドファンディングのような、羽田八幡宮に奉納や寄付する形で行われ文庫は共同運営された。因みに、中心となった羽田野敬雄が羽田八幡宮の神主でもあり、伊勢神宮の「神宮文庫」に倣って、神社に置くことで蔵書や文庫が永く存続すると考えられたもの。

③ 書籍（木版刷り）の出版や飢饉などの時には食糧を配給する社会福祉事業もしており、今回閲覧した『ききんのこころえ』は、木版刷りにより出版され、広く三河国内に配布されていた。

④ 「羽田八幡宮文庫」の貴重さは、以上のような活動の様子や記録などが分かることである。

さて、豊橋市中央図書館を後に一行はお楽しみの昼食へと向かうのであった。そして、本日の昼食は豊橋一番の高層ビル「ロワジールホテル豊橋」の一階にあるレストランでした。ホテルの売店では、数量限定のパンを当グループが全てお買い上げのようでした。

地域経済に協力!!

これも旅の楽しみです。

続いて訪れたのは、江戸時代の東海道五十三次、江戸から数えて十三番目、三河の国最東端の宿場町（宿駅・道の駅）「二川」の「豊橋市二川宿本陣資料館」です。二川宿は刈谷の殿様の参勤交代に帯同した忠順翁も宿泊し、歌を残しているとのことであった。

ここは東海道の宿場町では二ヶ所（二川と滋賀の草津）しか現存しないという「本陣」（参勤交代の大名や公家の宿となる）を補修復元した施設に、隣接の旅籠屋「清明屋」の施設を加えて、更に江戸時代の旅の博物館とも言える「資料館」が一体となり、キャッチフレーズに示された、

「今、江戸時代の旅が甦る」がピッタリの実に見ごたえのある施設でした。

「月日は百代の過客にして行き交う年も又旅人なり・・・・」

また旅に出たくなる・・・・そんな気分になったのは私だけだろうか？

そして最後に現代の「道の駅とよはし」（国道二三号線）に立ち寄って、旬の果物や地場産品などの買い物を楽しんで、帰途につくのでありました。

終わりに、訪問先の下調べ・行程の検討、資料の作成、当日の配慮等々の企画運営にご尽力いただいた顕彰会事務局の皆様に敬意を表すると共にお礼申しあげます。短くも後ろ髪を引かれるような中身の濃いテーマ旅を有り難うございました。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

村上忠順と小澤蘆庵家集

國學院大學文学部兼任講師　中澤伸弘

村上家に『蓬蘆文集』と題する忠順自筆の一冊の文集がある。嘉永六年十二月の忠順の序文が備はり、子曰述懐を巻頭に全てで五十九編の忠順の文章が収められてゐる。この中には忠順が自ら編んだ書物の自序をはじめ、他者から求められて書いた序文などがある。中には未刊の書物の序文もあつて、興味深いものである。その中に次のやうな「小澤蘆庵家集序」と題するものがある。京の歌人である小澤蘆庵に対する忠順の思ひが伺はれるのでここに掲げる。

小澤蘆庵家集序

小澤蘆庵と聞ゆる人ハ近き世のいみじき歌よみなる事はたれかはしらざらむ　その家集六帖詠草はやう板にゑりて世にもてあそぶめり　また近き年拾遺ふた巻いで来にたれば　いまはあかぬ事もあらざらめど　猶その全集五十巻なにがしの宮の御庵にあるを　いたうむしばみたれバ　このころうらうちしたまへるとみさとの尼蓮月がもとよりいひおこせたるをきゝて　いかで見まほしとハ思へどさるやむ事なきあたりにひめおきたまへる書なれバ　ゐなか人のいかで見るやうあらむとと思ひしつむれど猶たへかねてかけりてものぼらばやと思（ひわたりし）ふ事なむ多かるころ尾張國小田井の里なる賢明法師うつしもたりと聞て　いかでからばやとハ思へど　其法師ひとたびふたたびあひみつる事ハあれど　えよくもしらねばバいかにせむと思ひわづらふをりしも　幽松院律師に雲光山の歌のつどひの夜　よこねの里にあひて　ゆくりなくかたり出たれバ　おのれ法師をよくしれゝバ　事のついでにかたりてむといはるゝものから　さるひめぶみをバいかでかしおこせむと　うしろめたう思ひをるに　はつかばかり有てせをそこもてくる人あり　何事にかと引ときて見れバ　法師にそのことひやりたれバ　いたくよろこびておのがもとにたゞ一とももたらむにハ思ひかけぬ事にてうせなむもはかりがたけれバいかゞうしろめたくのみ思ひなりしをさる人ありてうつしとらむとならバかしてむとてやがておくりおこしなりとてえさせたり　いとうれしくて其夜より筆おこして夜なよな三十ひら四十ひらばかりつゝ写しとりてやうやうに写しはてぬ　そもそもこの翁ハ　いとめでたき歌よみにハあれどいとふるき人にもあらねバ　さばかり心つくしてうつすべきにもあらずとしりうごとする人も有べし　おのが心にもこれらの集にいたづかむよりハ　いにしへの名高き書のいまだ板にゑらぬをこそうつすべき事なれとハ思ふものから　さ

る書もたる人のありともきかねバせむすべなし　これハたまたまやすくえにたれバかくはゝづしつるなり　ふるきをすてゝ近きをこのむといふにハあらずなむ　さハいへ二三百ねんこなた古まなびさかりになりて　歌よむ人は野べの草葉よりもしげく濱のまさごの数にもまさりぬべく　いと多かれど　みないふかひなきかいなでの人のみにして　この翁に立まさる人は岡べの翁をおきてハ又あらめや　千蔭春海といへどもなほこよなしかし　かゝれバ　この人をこそちかき世の歌よみといふべかれ　あないみじの歌よみや　あなめでたのうたよみや

忠順は蘆庵にかなり私淑してゐたと見え、蘆庵同様の素晴らしい歌人は賀茂眞淵しかゐないと言つてゐる。橘千蔭や村田春海も及ぶ者ではなく、文末において「あないみじの歌よみや　あなめでたのうたよみや」と称へてゐる。その家集を手に入れて書写し、このやうな序文を書いたのであつて、この入手の経緯を述べてゐる。

忠順は序に、蘆庵には早くに『六帖詠草』（歿後十年後の文化八年刊）といふ歌集があり、最近その『拾遺』（嘉永二年）も刊行されたが、全集五十巻が京都の某宮家にあることを蓮月から聞き、見たいものだと思ってゐたが、この頃尾張の小田井の賢明法師が写本で所持してゐると聞き、何とかして借りたいと思ったが、それほど面識のある人物ではない。困ってゐる時に、雲光山の歌会の夜、幽松院律師にこのことを話したら、偶然にも知り合いであり、話がうまくついて、約二十日後にこの家集が届いた。賢明は自分ひとりで所持してゐても何かの折に紛失することを恐れて貸し出すといふのであつた。そこで忠順はこの日から毎日三、四十丁を写したのである。蘆庵は近い時代の人物なので、その歌など写す必要はないといふ人がゐるが、自分に取り蘆庵は格別だといふのである。

かくて賢明法師から借りて写した家集は、いま『蘆庵歌集』と題して村上文庫にある十八冊である。ここにこの序文を加へたのである。

この序文に見えることの傍証として蓮月との関係がある。京の蓮月と忠順との関係はある時から親密となり、『蓮月全集』には忠順と蓮月との間で遣り取りした書簡が収められてゐる。これは後に簗瀬一雄先生の『近世歌人書簡集』第一冊に転載されてゐる。ここに以下のやうな言及がある。

○蓮月書簡（嘉永四年）九月二日付　先掲『書簡集』第一冊　二四（以下引用は同断）

こゝに小澤ろあんぬしものし給ひし文ども、宮の御蔵にこめたまひしを、いかで見てしがなと、とし比思ひわたりしを、こたび、このみ寺のりしの君に、とかくたばかりものして、いとみそかに、かくれて見侍る事になむ侍る。

※夏頃岡崎に移住し某宮家（妙法院宮か）に蘆庵の自筆書があるのを密かに見てゐることを忠順に告げる。

○忠順書簡　先掲書二五（翌嘉永五年の二月頃か　二四便の返事）

うちうちに小澤翁の書ども見たまひて、・・・いといと羨ましうなむ。（略）こゝだきの書どもあらむと、おしはかられ侍れ。いかでそのふみの名をだにもらしたまひね。おのれもこの比、翁の全集全部もたる人ありと聞侍れば、からまほしう思ひたまふれど、いたくひめもたると聞て、いまだ打出侍らず。去歳より見たまふらむあまたの書の中には、その全集も有べきにこそ。六帖詠草同拾遺などよりも、中々をかしきふし有ぬべしと思へば、いといとゆかしうなむ。

※蓮月からの蘆庵の歌書の存在を聞いて忠順は只ならぬ興味を抱き、書名を教へてほ

しいと告げた。そして蘆庵の全集を持つてゐる人がゐるが、まだ連絡をとつてゐない。昨年から見てゐるその書物の中に全集がないか気になつてゐる、と。この全集を持つてゐる人物は序文にある尾張の賢明法師のことであらう。この人物は忠順の『類題玉藻集』初二編ともに各一首の歌が見えるだけで、なるほど深い関係ではなかつたことがわかる。その作者姓名録には「小田井　長善寺」とある。歌は次のものである。

初編　山居絶是非　よしあしの世のちりとてはしら雲のかゝる庵こそ住よかりけれ

二編　忠順新室祝「栽松」にひむろのまがき柱に立そひてまつもさかえむときはかきはに

なほここに見える幽松　院律師、雲光山の歌会は不明である。

○蓮月書簡　先掲書二六　二五便の返事

小澤ぬしの書は、れいの六帖詠草五十巻、半紙とぢ五十枚ばかりひしと書つめ、その比の伴ぬし、てう月、大愚、秋成、ゆれん、千かげ、春海、かたがたの行かひも侍り。外に座右の記廿まき、これはことに虫ばみて、うらうちも出来侍らで、くちをし。歌のまき五十巻は、うらうちも出来さもらひて、いとよろしうなりぬ。

※ここで六帖詠草五十巻の名が初めて出る（刊本『六帖詠草』の選歌原本となつた歌集（全集）であらう。現在静嘉堂文庫に四十七冊存のものか）。それは虫損の裏打ちが出来たといふので序文はこの書簡を踏まへた内容となつてゐる。

○忠順書簡　先掲書二七　嘉永五年卯月（ここに年月が明記されるので、一連の書簡の年代が分かる）二六便の返事

小澤翁の書ども、しみのすみかとなりぬと承るは、あたらしともあたらしきわざになむ。

※蘆庵の全集の虫損を残念に思つてゐる。

この一連の書簡の往復により忠順が賢明法師から蘆庵の家集を借りて書いたのが嘉永五年であつたことが明らかになる。『蓬蘆文集』が編まれたのが嘉永六年であつて、年代に齟齬はない。但し、蓮月のいふ五十巻と忠順が書写したものとが同じものかは比較検討の必要がある。

忠順が編んだ『類題玉藻集』初二編にある蘆庵の歌は次のやうなものである。ここでは歌題のみ挙げておく。

初編　春部二十首（立春　早春　早春梅　沢若菜　霞　浜霞　行路霞　余寒氷　春雪　鶯　雪中鶯　朝鶯　夕梅　行路柳　柳糸緑新　喚子鳥　雲雀落　待花対梢　閑看花　山花　菜花）、**夏部十一首**（早苗　江五月雨　泊水鶏　瀬鵜川　照射　夏草露　瞿麦露　夏夜易明　夕立風　氷室　晩夏納涼）、**秋部九首**（立秋　閑居早秋　七夕別　草花未遍　行路薄　野女郎花　朝顔　刈萱　稲妻）、**冬部二十二首**（初冬　十月紅葉　古寺落葉　寒叢残菊　寒草霜　野寒草　池寒芦　橋上霜　橋下氷　浜千鳥　河網代　疎屋霰　雪　浦雪　湖雪　水上雪　遠村雪　鷹狩　炭竈　梅花先春　歳暮　除夜）、**恋部三十一首**（恋　忍逢恋　聞恋　初祈恋　夢逢恋　後朝恋　後朝切恋　会不遇恋　久恋　遠恋　隔物語恋　占恋　片恋　恨　偽恋　恋天象　夕恋　春夜恋　夏忍恋　私恋　恋衣　寄日恋　寄星恋　寄電恋　寄夕恋　寄河恋　寄禁中恋　寄筵恋　寄車恋　寄衾恋　寄弓恋）、**雑部六十九首**（晴　遠村烟　暁　朝　窓燈　伊夜彦山　名所路　名所瀧　河　伊津貫川　海路　磯　村　山家　別　羇中橋　羇中磯　旅宿　旅宿雨　旅宿夢　旅泊　旅泊月　旅泊夢　朝眺望　松　潤底松久　杉　槙　嶺椿　樒　朴　櫪　笹　巌苔　青つつら　蓼　夜鶴鳴皐　鳥鶴　鷺立斜陽裏　筥鳥　馬　猫　披書知昔　文詞　言葉　筆写人心　鐘　鐘声何方　衣　帯　舟　舟過芦洲　樵歌　樵客情　行客　道士　老人　王昭君

述懐　寄風述懐　寄露述懐　寄沼述懐　寄橋述懐　懐旧　老人懐旧　思往時　社　祝　祝言　寄松祝)、**詞書歌四首**(水野万空の故郷へかへるに扇をおくるとて　みるもの聞ものにつけて涙もろき～　維済の児の母のみまかりしが後～但馬敬義がもとよりみるをおこせて～)合計百六十六首に及ぶ。

　これらの歌は(全てを確認してはゐないが)刊本の『六帖詠草』から採つたものではないやうである。忠順が写した家集からの転載である可能性もあるが、村上文庫蔵本と、この検討も後日に期したい。

　このやうに初編では高く評価して、多くの歌を採られた蘆庵であるが、何故か二編には三首しか載らず、これは何を意味してゐるのか定かではない。三首は次の歌でこれも刊本の『六帖詠草』には見えない。

除夜　ふけにける我世いつまで行かへ
　りきせぬ年のくれと惜しまむ

江葦　うきふしはよししげくともなに
　は江の短きあしのよは過してむ

軒のあふちの咲をみて
　花の色はおぼつかなきを風わた
　る軒のあふちは香にてしらるゝ

(以上原文のまま)

令和五年度活動報告

○五月七日(日)
定例総会　出席者　九十九名
＊「忠順大賞」表彰式　対象者二十名
＊記念講演「幕末の刈谷藩」
講師　刈谷市歴史博物館学芸員
長澤　慎二氏

○五月三十日(火)
第一回役員会　出席者二十六名
＊顕彰会発足経緯について
＊四年度事業・予算計画
＊会費徴収について

○七月四日(火)
女性部研修会　参加者　三十九名
＊「忠順と掛川(仰徳館)」
＊見学　宮内省下賜の旧有栖川宮熾仁親王御座所(仰徳館)と二宮尊徳の教えを繋ぐ大日本報徳社
＊昼食　掛川市「こだわりっぱ」
＊観光　掛川城・掛川花鳥園

○八月四日・九月一日・十月六日・十一月三日(各月第一金)
四方樹大学　受講者延べ　六十一名
＊講師　名古屋大学名誉教授　塩村　耕先生
＊講義　忠順翁の『座右記』読み解き

○十一月十三日(金)
歴史探訪　参加者　四十一名
「忠順翁ゆかりの地をたずねて」
＊見学「羽田八幡宮文庫址」(表紙)
＊講演「羽田八幡宮文庫について」
講師　豊橋市中央図書館学芸員
岡村　龍男　氏
＊昼食「ロワジールホテル豊橋」
＊豊橋市二川宿本陣資料館見学
参勤交代には忠順さんも宿泊
帰路では「道の駅　とよはし」立寄

○十一月十九日(日)
みんなで楽しむ短歌づくり　第三回
受講者　十六名
＊講師　久米　翠雲　先生(忠順大賞選者)

○十一月二十三日(祝日)
第二回役員会実施　出席者　二十四名
＊村上忠順翁墓参・千巻の舎碑と建物見学
＊ビデオ「刻の遺産(村上忠順)」視聴
＊顕彰会活動報告と意見交換

第十八回「忠順大賞」

（令和五年度）

入賞作品
応募総数　一五〇四首
選　評　久米翠雲先生

○ 小学生の部

豊田市長賞

堤小　六年　山崎　祐聖

いろいろなサイズのくつが
せいぞろい
楽しい年が始まる予感

※おじ・おば・いとこたちが帰省して大にぎわい。それをいろいろなサイズのくつと表現したのが上手い。

豊田市議会議長賞

堤小　五年　市川　晴登

まだかなあもちをにらんだ
父とぼく
こげ目がまてず　あみからはがす

※父と子で、餅を焼いている。早く食べたい、網についてしまうかも。二句目で雰囲気が伝わり面白い。

豊田市教育委員会賞

駒場小四年　中野　日向

はつもうでしんが起きて
こわくなり
母に近寄り甘え上手に

※下の句が大変楽しい。非常事態だったが、とっさの行動で母にしがみついて甘えられて良かったね。

中日新聞社賞

堤小五年　大久保　奏子

尉鶲（じょうびたき）庭でカッカと鳴く声は
遠くへ響く冬のお知らせ

※火打石を打つような鳴き声。遠く中国大陸から越冬のため日本に渡る。冬が来るぞと皆に知らせる。上手い。

会長賞　金賞

堤小三年　岩田　紗菜

クリスマスサンタクロースに
ケーキのおれい
朝見てみたらかん食してた

※サンタさんにお礼のケーキなんて優しいね。サンタさんもビックリしたでしょう。完食、良かったね。

会長賞　銀賞

堤小四年　子玉　櫻子

気づいてね君はだれかの宝もの
君は一人じゃないからね

※人はだれもが素晴らしいものを持っている。それは誰かに伝わり、宝ものとなる。すごいね！素晴らしい考え。

会長賞　銅賞

堤小一年　深谷　心咲

うれしいなもうすぐわたし
おねえちゃん
おせわはまかせて！
まってるからね

※お母さんから、もうすぐお姉さんになるよ、と言われてびっくりしたけど、うれしいな。第五句が良いですね。

優秀賞（三名）

堤小三年　佐々木　桃子

としこしをはじめてすごす
ともだちと
さんにいちぜろまたよろしくね

※おおみそかに神殿で巫女舞をした。その時にお友達と除夜の鐘を聞き、年越しをした。秒読みが楽しい。

駒場小六年　清水　勇翔

おおみそか年に一度のかねならし
年をこすとき　みんなでジャンプ

※家族全員かな。友だちもいたでしょうね。鐘を鳴らして、新しい年へジャンプして、一歩踏み出した。心躍る、いいね。

堤小六年　清原　珠友

お姉さんたまあにケンカ口きかず
知らないうちに　いつもの会話

※下の句がいいですね。お姉さんとは、本当は仲良しなんだね。ケンカの前より仲良くなっているのでしょうね。

○ 中学・一般の部

豊田市長賞

前林中一年　大島　さちほ

友達と遊びに行く度減る貯金
それでも増えてく思い出貯金

※お友達との遊びには、自分の貯金を使う。しかし、友達との思い出は、何物にも代えがたい。下の句が素晴らしい。

豊田市議会議長賞

高岡本町　神尾　やす子

「やすやん」と今も呼ばるる
いとこより
ふるさと思うなつかしき名よ

※故郷の幼馴染は当時の呼び名で話し合える。そんな懐かしい名前で呼び合えるのが嬉しい故郷。

豊田市教育委員会賞

前林中二年　宮﨑　結人

友達と一緒に歩くの楽しいな
自転車よりも絆深まる

※いつもは自転車で通っているが、今日は引いて下校し、友と色々話ができた。下の句で思いが全て出ている。

中日新聞社賞

前林中三年　作本　恵梨華

いつだって家に帰ればホットする
私の心のチャージ場所

※学校生活には、いいことばかりでもない。嫌なことも出てくる。家に帰ると忘れ元気になる。下の句が新鮮。

会長賞　金賞

前林中三年　石川　結萌

「もう消すよ」弟電気に手をのばす
もう届くのかと成長感じる

※毎日一緒に生活していると、気がつかない。ふっと弟の成長を感じた。上の句の着眼がいい。素直な表現。

会長賞　銀賞

前林中二年　宮城　凜

「寒いね」と悴（かじか）んだ手を握り合う
友の笑顔は冬の太陽

※学校の廊下で出会った親友。寒いね。うん寒い！悴んだ手を握り合った。温かい、笑いあう。下の句でまとまった。

会長賞　銅賞

前林中二年　馬田　結羽

空を飛ぶお菓子のブーケ
手をのばす
ひまわり色の二人の笑顔

※幸せのおすそ分けの意味で花嫁が投げる。お菓子のブーケ。花嫁・花婿が向日葵の様に、幸せに輝いていた。

優秀賞（三名）

前林中三年　田中　エベリン

弟が私の部屋でくつろいで
怒りたいけど怒れないのだ

※弟は自分の勉強を終え(?)私の部屋でくつろぐ。怒りたいが怒れない。気分良くしているから。下の句がいいね。

前林中二年　甲村　勇貴

コロナ禍で慣れてしまったマスク姿
勇気を出して外してみよう

※コロナ禍で日常のマスク。くぐもった声と目だけの会話。取ってもいいのに、取れないマスク。互いの顔見たい。

前林中一年　佐藤　杏紗

仲間たちみんなで泣いて
よろこんだ
夏の大会ブザービーター

※これはドラマですね。最後まで、諦めない。それが逆転勝利につながった。お見事。喜びと感動が伝わる。

無審査　優秀作品

前林町　甲村　サカエ

恙ない皆独り居の和むるは
折々逢ふて脳トレをせむ

堤町　石川　小智子

孫が来てゲームしながら
ユーチューブ
テレビ見せてよダメのひと言

あとがき

第十八回「忠順大賞」に一五〇四首の作品の応募があり、久米翠雲先生による最終審査で二十名の入選者が決定いたしました。

久米先生から、今年は非常に素晴らしい作品が多かったです。楽しく読ませてもらいましたとのお言葉とともに、入選作品に選評も添えていただきました。

令和五年度も開催しました「短歌づくり教室」に、一般の方と共に小学生の参加者もあり、入賞者もおられます。事務局一同とても嬉しく励みに思っております。本当におめでとうございました。

お忙しい中、指導・協力していただいています小・中学校の先生方、地域内外から応募していただいた大勢のかたに感謝致します。

（事務局　川村）